

1982年フィンランド大統領選挙 (4)

Finnish Presidential Election in 1982 (4)

坂 上 宏

要 約

ソ連は、1979年の第二次コイヴィスト内閣の組閣にあたって、保守の国民連合党の入閣に反対した。ソ連は、同党が入閣することによってフィンランドが西側に接近することを懸念したのである。

また国民連合党が入閣できなかったことについて、ヴィロライネン国会議長は、それがケッコネン大統領による対ソ配慮に基づく措置であったことを示唆する発言をした。この発言をめぐり、両者の間で軋轢が生じ、権力闘争にまで発展するのであった。これは、1982年大統領選挙の帰趨にも影響を及ぼすものであったのである。

目 次

はじめに一問題の所在

序論 フィンランド大統領

(以上『九州情報大学研究論集』第1巻第1号)

第1章 ケッコネンの黄昏——ケッコネン五選とケッコネン政治

(以上『九州情報大学研究論集』第5巻第1号)

第2章 コイヴィストの黎明——第二次コイヴィスト内閣の成立をめぐる政治状況

第1節 国会選挙と組閣の経緯

第2節 コイヴィストの首相就任をめぐる政治状況

(以上『九州情報大学研究論集』第7巻第1号)

第3節 国民連合党入閣問題

第4節 夏至爆弾発言事件

(以上本号)

第3章 コイヴィストの黎明

第3節 国民連合党の入閣問題とソ連

第1節で述べた通り、1979年国会選挙では、野党国民連合党が事前の予想にたがわず、12議席を増やし(35→47)、人民民主連盟や中央党を抜いて一気に国会第二党へ躍進した。この結果、1964年に発足したヴィロライネン内閣以来、ひさしぶりの国民連合党の入閣が期待されたのであった。しかしホルケリ党首による各党間の連立交渉は失敗し、結局国民連合党の入閣は果たせなかったのであった。

ところで同党の入閣問題に関して、筆者がここで議論したいことは、ソ連が国民連合党の入閣に反対したことである。以下では、このソ連の反対がどのような利害関心に基づくものであったのかを考察する。併せてソ連の対フィンランド外交に見られるアプローチの比較検討を行うことにする。

まず国民連合党の入閣問題に関するソ連の対応から述べる。そもそも同党は、政治的に西側寄りの保守政党と見られており、同党の内部では、ケッコネン大統領の親ソ的な対外政策や彼の長期支配に対して異を唱える声が、以前から他党よりも強かった。したがってソ連側は、同党が連立内閣の一員となり、その結果、「親ソ中立」という従来のフィンランドの対外基本方針に、何らかの変更が加えられる事態が惹起することを懸念していたのである。こうしたソ連の不安は、報道や指導者の発言から読み取ることができる。以下において、そうしたものの内でいくつかを記しておきたい(すでにフィンランド語の文献に引用されたものであることを断っておく)。

最初にソ連の新聞報道であるが、1979年初めに『ノーボエ・ブレーミヤ』紙(*Novoje Vremja*)は、「フィンランドの右翼勢力の活動は、両国の善隣関係に敵対するものである。そのためフィンランドの左翼諸政党は、国民連合党と連立協力をしないだろう」と報じた。また同年3月10日付『プラウダ』紙(*Pravda*)は、ヘルシンキ特派員クズネツォフ(Kuznetsov)署名の記事の中で、国民連合党は外交上信用できないと述べて、同党が選挙後に入閣することについて反対した。なおスオミ(前出)によれば、この記事は、ステパノフ在フィンランド・ソ連大使のさしがねで書かれたという。⁵⁹⁾

ソ連要人の発言については、やはりスオミの叙述を紹介しておきたい。1978年11月モスクワを訪れたフィンランド中央党代表団に対して、ソ連共産党のある重要人物が、次のように述べた。「国民連合党の台頭は、危険な現象だ。それは両国関係を損なうものである。われわれは、そうしたことを心配している」。またソ連大使館のウラディミロフ参事官は、1979年組閣交渉の準備段階で、中央党のヴァユリユネンとカルヤライネンに対して、「国民連合党を内閣に迎え入れるべきではない」⁶⁰⁾と述べた。さらに1979年1月末にモスクワを訪れたフィンランド共産党代表団に対して、スースロフ(Mikhail Suslov, ソ連共産党中央委員会政治局員)は、「フィンランドの右派勢力が、両国の友好関係を傷つけることを狙っている」旨警告を発している。この後、2月末にレニングラード(現サンクトペテルブルグ)を訪れたフィンランドのソルサ首相に対して、ロマノフ(Grigori Romanov, ソ連共産党中央委員会政治局員)は、「両国関係の良好な発展を妨害しようとする勢力から守ることが必要だ」と語った。⁶¹⁾ スース

ロフやロマノフも、直接には言及していないが、両者の発言は、ソ連側が国民連合党の勢力拡大について懸念していることを示唆するものであった。

ウラディミロフは、ソ連が国民連合党を不安視する理由について、1979年4月9日のケッコネン宛書簡の中で次のように述べている。「……われわれの原則的見解は、国民連合党にはさらなる権力を与えるべきではないということである。つまり同党は、現在の(両国の)友好関係や大統領の対外政策とは調和していないのである。今回の国会選挙(1979年)でもわれわれは、同党が連立政権に参画することについて、原則的には考えに変わりはない……M(モスクワ)は同党の対外政策を信頼していない」(括弧は筆者)⁶²⁾。

そもそもソ連が、フィンランドの組閣問題や政権人事に容喙したのはこれが初めてではない。例えば「コルホネン問題」に、こうしたソ連の行動形態を見てとることができる。以下はその経緯である。1977年5月の第二次ソルサ内閣の編成にあたってケッコネンは、ミエットネン前内閣(Martti Miettinen, 1976年9月29日～1977年5月15日)のコルホネン外相を留任させようとした。しかしケッコネンは、この姿勢を一転させ、5月10日にコルホネンに対して、「君はロシア人とは働けないだろう。外相を辞めて、大使としてワシントンへ異動するように」と伝えたのであった。結局コルホネンは、在米大使に転出することになる。コルホネンの回顧録を管見する限り、この人事劇の裏で暗躍していた人物は、当時のソ連大使ステパノフであり、さらにステパノフと共に策謀をめぐらせていたのが、のちにヴィロライネンと中央党党首の座をめぐって争うことになるミエットネン内閣の労

働大臣ヴァユリユネン(中央党)とペルットゥネン大統領府長官であった。なかでもステパノフは、コルホネンがフィンランドの対外政策方針の中で、対ソ関係よりも中立に重きを置いているという理由で、コルホネン外相を辞任させるべくケッコネンへ圧力をかけていたのであった。

ところでその後ヴァユリユネンは、第二次ソルサ内閣で、コルホネンに代わって外相に任命されている。どうやらヴァユリユネンは、コルホネンを外相という影響力の大きいポストから引きずり落として、自分が代わってその座に就くことを狙っていたようである。一方のコルホネンは、こうした企ての首謀者が誰であったか気付いていた。彼は回顧録の中で、「……新内閣が組閣される。誰かが私から内閣を切り離したいと欲している。……ヴァユリユネンの子分とステパノフは、私の悪口を言っている。これ以外のことは考えられない」⁶³⁾と述べている。

こうした権謀術数は、ヴァユリユネンの政治行動において、しばしば見られるものであるが、それは彼の体の奥底から湧出したものであったと言えるかもしれない。特にソ連の影響力を背景にして、あるいは上記のように、ソ連側と結託して事を運ぼうとするヴァユリユネンのごとき行動の中に、ソ連の影響力に寄生し、それを糧にして自己の権力欲の充足をはかろうとするケッコネン体制におけるフィンランドの政治アクターの一つの型を見ることも可能かと思われる。

「コルホネン問題」のほかに、ソ連の干渉によってフィンランド政治の独立性が大きく揺さぶられた出来事は、1958年の「霜夜事件」と1962年の「覚書事件」があげられる。「霜夜事件」は、1958年8月29日に成立した第三次ファーゲルフォルム内閣(Karl August Fagerholm, 1958年8月29日～1959年1月13日)が「反ケッ

コネン的である」という理由で、ソ連が様々な圧力をフィンランドに加えたため、両国関係が冷却化した出来事であった。「覚書事件」のあらましは次の通りである。1962年の大統領選挙に、社民党や国民連合党など六党が、元検事総長ホンカ (Olavi Honka) を統一候補に擁立してケッコネン打倒を図った。このためケッコネンの対ソ友好政策の継続に不安を感じたソ連のフルシチョフ首相 (Nikita Khrushchyov) が、「フィンランド・ソ連友好協力相互援助条約」の第二条軍事協議条項の発動を要請する覚書をフィンランドに送った。この条項が発動されれば、フィンランドがソ連の軍事指揮下に入る事態も想定された。そうなればフィンランドの国家的独立は、危機に瀕することになるのであった。しかしその後ホンカが、大統領候補を辞退したため、危機は回避されたのであった。

このようにソ連は、フィンランド内政上の節目にあたって、たびたび圧力を加えてきたのである。そうしたソ連の行動に共通する目的は、既述の通りフィンランドがソ連の勢力圏から離れて西側に接近することを防ぐことにあったのであり、従来からの対ソ友好方針をフィンランドに維持させることにあったと言えよう。この文脈に照らしてみれば、西側寄りで反ケッコネンと目される国民連合党の台頭は、従来のフィンランドの対ソ基本方針を脅かしかねないものとしてソ連側に映ったのだろう。

要するにソ連のフィンランドに対する行動上の基本的枠組みは、安全保障に関わる不安感に根差すものであった。それではソ連の国家指導者や外交官は、フィンランドに対して実際にどのような姿勢で接したのであろうか。そこには多少の違いが見い出せるように思われる。以下ではこの点について、「大国主義的アプローチ」

と「現実主義的アプローチ」に大別して考えてみたい。

前者は、宗主国的支配意識が前面にあらわれた言動であり、しばしば高圧的な態度でフィンランド側に接しようとするものである。後者は、ケッコネンの親ソ路線や左翼中道内閣の継続を望む点では前者と変わらない。しかしフィンランドの政権人事に表立って露骨な干渉を加えたり、「革命の輸出」と受け取られかねないような行動を慎もうとする。なぜならウラディミロフの言葉を借りるならば、1970年代末に至ってフィンランド・ソ連関係は、「可能な限りの満足する最善の高みに達した」からである。彼は次のように述べる。「(両国関係を現在よりも) さらに高いレベルに引き上げようとする試みは、すでに形成された利益のバランスを揺さぶるかもしれないし、反対の結果を招くかもしれない。(両国関係は) 平和的な水平飛行に移行している」(括弧は筆者)。⁶⁴⁾ こうした認識に立却するならば、ソ連が、ロシア統治時代を想起させるような高みから見下ろす振る舞いをフィンランドに対してとることは禁物であった。なぜならばそうした行動は、フィンランド側の反発を招き、ひいては戦後を通じて築き上げてきた両国の善隣関係を根底から覆してしまいかねなかったからである。

1979年当時の在フィンランド・ソ連大使館の状況を管見する限りでは、ステパノフ大使はまさに大国主義的であり、ウラディミロフ参事官が現実主義的であったと言えるだろう。両者ともフィンランド勤務が長く、フィンランド語を流暢に使いこなし、フィンランドの政財界との関係も緊密であった。⁶⁵⁾ この2人の姿勢の違いについてスオミは、次のように明快に対比させている。「ソ連にとって良いことは、フィンラ

ンドにとっても良いことだとステパノフは見ていた。—あるいは少なくともフィンランドは、我慢して受け入れるべきだと彼は考えていた—。ウラディミロフの対応の仕方は違っていた。彼は、フィンランドにとって良いことはソ連にもしばしば利益をもたらすと考えていたのである」。またウラディミロフは、ステパノフがフィンランド人に接する姿勢について、「いつも威張っていたし、独裁的であり、フィンランド政府がとるべき態度について自分の意見を述べた。ステパノフは、フィンランドが独立国家であることを忘れてしまっていたし、まるで王様のように振舞った」と批判している。一方でウラディミロフのフィンランド側に対応する物腰は、「親戚に接する」かのように気さくで和やかなもので、相手の意見に注意深く耳を傾けようとして見られていた。⁶⁶⁾ なおウラディミロフによれば、彼とステパノフのあいだには、実際に対立があったようである。彼はケッコネンに対して、「自分とステパノフの関係は、完全に分裂している」と語っているし、第二次コイヴィスト内閣のヴァユリユネン外相に対しては、「ケッコネンがステパノフの交代に理解を示せば、それはすぐに実現するだろう」とまで述べていた。⁶⁷⁾

ところで1970年代末期のソ連指導部は、フィンランドに対して「大国主義」と「現実主義」のどちらの手法を採っていたのだろうか。少なくともウラディミロフの所属する KGB 内部では、「手法」をめぐる見解の対立、あるいは人間関係の錯綜とした状態があったようである。そして最終的には、ウラディミロフの「現実主義」が、ステパノフの「大国主義」を駆逐したように思える。筆者は、この点をはっきりと証明する資料を入手していないので、断定は避け

たい。しかしウラディミロフの回顧録やステパノフ大使更迭などの事実から、「手法」をめぐる KGB 内部で対立があったことが窺えるのである。この点で示唆に富むのは、次のエピソードである。1977年当時、ウラディミロフの三度目のフィンランド勤務について、KGB 上層部では意見の不一致があった。当時の KGB 第一副委員長ツィネフ (G.K.Tsinev) は、ウラディミロフのフィンランド勤務に反対していた。これに対して KGB 委員長アンドロポフ (Juri Andropov) は、休暇中のツィネフを電話でそれとなく説得し、ウラディミロフのフィンランド行きが最終的に決まったのであった。⁶⁸⁾

ウラディミロフによれば、この時彼に与えられた任務は、ステパノフ大使がフィンランド側と過度に非公式のコンタクトを取ることをできるだけ制限し、代わって彼がケッコネンを始めとするフィンランド要人との非公式なコンタクトを維持することであった。⁶⁹⁾ 当時のフィンランドの中には、ステパノフの言動がフィンランドの内政や外交問題に関わるモスクワの見解を押しつけようとするものだ と解釈する向きもあり、こうしたフィンランドの反応はモスクワにも届いていた。したがってウラディミロフは、両国の関係を損ねかねないステパノフに対する「対抗者」として、当時のアンドロポフ KGB 委員長の肝煎りで、1977年にフィンランドへ派遣されたのであった。⁷⁰⁾

ウラディミロフは、ステパノフの行動について様々な角度から批判を展開しているが、とりわけ次の二つの点が、ステパノフの大きな失敗であると指摘した。第一に、ソ連のウスチノフ国防相 (Dmitri Ustinov) が、1977年7月にフィンランドを訪問した時のステパノフの独断的行動である。フィンランドを訪れたウスチノ

フは、両国の共同軍事演習を提案した。これに対してケッコネンやフィンランド軍のステラ最高司令官 (Lauri Sutela) は、演習が実施されればフィンランドの中立の信頼性が損なわれることを懸念した。したがってケッコネンは、ウスチノフに対して明確な回答を避け、併せて軍事演習には婉曲的に反対の意を示したのである。ここで問題にされるべきは、このウスチノフ提案がステパノフのイニシアチブでなされたこと、さらにステパノフは、ソ連共産党中央委員会国際部からこの問題を進展させてよいという許可を得ていなかったことである。ウスチノフによる提案がフィンランド側に受け入れられなかったこともあって、ステパノフの行動は、モスクワ指導部で批判の対象とされたのである。⁷¹⁾

ウラディミロフが指摘したステパノフのもう一つの失敗は、すでにふれたように彼が、フィンランドの1979年国会選挙の前に、選挙の帰趨を干渉する新聞論説に関わっていたことである。それは、同年3月10日付プラウダ紙が掲載した国民連合党入閣を懸念する論説であった (70ページ参照)。この論説がフィンランド国内の反発を招き、結果として国会選挙において、ソ連が望まない国民連合党の勝利に一役買い、同時に共産党系の人民民主連盟の敗北要因の一つに数えられたのであった。⁷²⁾ ウラディミロフは、そもそもこの選挙に対するソ連大使館の基本姿勢は、「中立・不介入」のはずであったのに、この論説のためにソ連の利益を損ねたとステパノフを批判した。⁷³⁾

ステパノフは、このようにソ連側で不興を買うところも多かったようであるが、フィンランド国内では嫌悪され、そして恐れられていた。フィンランドのある政治家が、ステパノフのことを「副大統領」とか「ケッコネンの次の大統

領は、ステパノフだ」と言ったことは、フィンランド側の彼に対する心情をよく表している。誤解を恐れずに言えば、ステパノフの言動はフィンランド人の中に、過去の帝政ロシア時代における圧政の記憶を蘇らせたのではなかろうか。ステパノフの増長ぶりは、ある局面においてケッコネンがステパノフに従属していると見られるほど、目に付いたようである。ケッコネンは、「もちろんステパノフは私を凌いでいる」とすら述べていた。当然の如くケッコネンは、そうしたステパノフを快く思っていなかった。ケッコネンはステパノフとのある会談の模様について、「ステパノフは本当に汚い。不愉快な議論だった。私は、1978年大統領選挙には立候補しないだろう」とステパノフへの強い不快感を吐露していた。⁷⁴⁾

ところでステパノフについては、結局1979年5月にフィンランド大使からカレリア自治共和国第一副首相への転出が決定された。⁷⁵⁾ この決定は、5月4日にウラディミロフからヴァユリユネン外相に伝えられた。この情報がフィンランド外務省に流れると、コニャックで乾杯する者もいたとのことである。それほどステパノフの異動は、フィンランド人にとっても僥倖であり、慶事でもあったのだろう。ウラディミロフは、「今後ステパノフが、フィンランド問題を取り扱う立場につくことはないだろう」と述べて、フィンランド側を安心させたのである。⁷⁶⁾

ウラディミロフによれば、この人事異動の内実は、ステパノフのフィンランドに対する高圧的な態度、独断ぶりへの「懲罰」であった。⁷⁷⁾ この人事によってソ連の対フィンランド外交のアプローチは、ウラディミロフの「現実主義」がさらに優勢になったと見ることもできよう。筆者は、ここでソ連外交全般にわたる手法につ

いて、一般化することを意図しているわけではない。ただ少なくとも1970年代末におけるソ連の対フィンランド外交には、「大国主義」と「現実主義」の二つの潮流が見い出せることを指摘しておきたいだけである。もちろんこれらの特質を、ステパノフとウラディミロフそれぞれの個人的性格に帰することもできよう。そうであるにしても、フィンランド問題に融和的姿勢をとるウラディミロフがソ連本国から派遣され、据傲であると批判されたステパノフが大使を罷免されたことは、ソ連指導部の対フィンランド外交における姿勢を物語っているように思われる。

ステパノフ大使の後任には、ソボレフ (V.M.Sobolev) が就任した。ウラディミロフによれば、ソボレフは「平和的なキャリア外交官」で、フィンランド問題についての知識はあまり持ち合わせていなかった。このためウラディミロフは、誰にも妨げられることなく対フィンランド外交に携わることができるようになったのである。極言すればこの人事異動によって、フィンランドにおけるクレムリンの代表者が、ウラディミロフとなったのである。⁷⁸⁾

以上、国民連合党の入閣問題をめぐるソ連の対応とソ連の対フィンランド外交に見られるアプローチについて議論してきた。次節では、同党の入閣問題を発端にして起きたケッコネンとヴィロライネンの対立について取り上げることにする。

第4節 夏至爆弾発言事件

本稿における主要な論点の一つが、フィンランドの内政と外交の相関性ということであった。具体的には、政権人事や連立内閣の政党構成をめぐって行われた各政党や有力指導者などのア

クターのあいだのやりとりが、対ソ関係にどのように主体的に絡みつき、そして対ソ関係をいかに自己の権力目的実現の糧としたかということである。筆者は、この内政と外交の連関が、第二次大戦後のフィンランドの対ソ関係における主要な特徴であったと考えている。本節では、1979年6月のヴィロライネンによる「夏至爆弾発言」(Juhannuspommi)を取り上げて、この内政と外交の結びつきについて検討してみたい。

(1) 夏至爆弾発言とその背景

夏至爆弾発言とは、同年6月15日付の『スオメン・クヴァレヘティ』誌 (Suomen Kuva-lehti) に掲載されたインタヴュー記事の中で、中央党のヴィロライネン党首が、「国民連合党が入閣できなかったのは、一般的な理由のためである」と述べたものを指す。以下にこのインタヴューの重要と思われる箇所を抜粋して引用しておく。

「国民連合党は選挙で大勝したが、(入閣に) 全く有利とはならなかった。今や彼らは、中央党の権力政治上の目的が入閣を阻んだ理由だと説明しようとしている。彼らが入閣できなかったのは、一般的な理由 (yleiset syyt) のためであり、国内的な理由 (sisäiset syyt) のためではない」。「(国民連合党は、対外政策上の理由のために入閣できなかったのではないかと質問に) 私はこの点について、説明することができない。しかし彼らが閣外へ出たのは、中央党が欲したからでもなければ、彼らが望んだためでもない。それは、国民連合党が(自己を) 変革することができなかったからである」。「われわれの立場が、ヨーロッパでどのようなものか思い出せない人がたくさんいる。われわれは、常に大国ソ連の隣に位置しており、そして西側

の制度を採用している国家なのだ」。(今回の組閣は、1958年の時のように失敗だったと言えるだろうかという質問に) もし同じような誤りを犯すとすれば、同じような結果を招くだろう。そうならば失敗ということになるのではないか」(括弧は筆者)。⁷⁹⁾

このインタビューの中でヴィロライネンは、「一般的な理由」の内容について明言していない。しかし彼の発言の文脈から、それは「対ソ配慮」あるいは「対ソ譲歩」であると推測できるであろう。もう少し踏み込んで言えば、このインタビューから、国民の期待に反して国民連合党が入閣できなかったのは、「ケッコネンが親西欧、反ケッコネン的な国民連合党の入閣を認めなかったからだ」という理由で、ケッコネンに非難の矛先を向けようとするヴィロライネンの底意を読み取ることも可能かもしれない。

インタビューの中で言及されている「1958年の時」とは、前記した「霜夜事件」を指す。重複する説明もあるが、その内容は次の通りである。この年の8月29日に、社民党5人、農民連盟5人、国民連合党3人、スウェーデン人民党1人、国民党1人の連立で第三次ファーゲルホルム内閣が発足した。しかしソ連は、この内閣が「反ケッコネン的である」という理由のもとで、同年秋から冬にかけて在フィンランド大使の召還(10月10日)やフィンランド産品の輸入停止(11月15日)などの露骨な圧力をかけたため、両国関係は極度に冷却化してしまった。事態収拾のために当時のヴィロライネン外相含む農民連盟の閣僚が辞任願を提出し、ファーゲルホルム内閣を瓦解させた(1959年1月13日)。そして1959年1月31日にケッコネン大統領は、スクセライネン農民連盟単独内閣(Vieno Sukselainen、1959年1月31日～1961年7月14日)

を任命し、一連の危機は終結したのであった。この事件は、対ソ関係が抜き差しならない危機に至り、フィンランドの国家的独立が危うくなりかねなかった事件として、1962年の「覚書事件」とともに、戦後フィンランド史の中で強く刻印されている。

ところで上記インタビュー記事の中で、ヴィロライネン自身は、「霜夜」(yöpakkas)という言葉を直接言及していない。しかし彼は、質問に応じて、1979年選挙後の組閣状況と霜夜事件を関連させて発言している。何よりもヴィロライネンが、この事件の当事者の一人であったという事実が、インタビュー中の彼の発言と霜夜事件の関連性を浮き立たせていると言えるだろう。またこのインタビュー記事の見出しが、「霜夜の恐怖が国民連合党を追い出した」というものであったことは、霜夜事件についての読者の記憶を解凍させるには十分であった。さらに1979年選挙後の第二次コイヴィスト内閣の編成にあたって、やはり霜夜事件と同様にソ連からの圧力があったのではないかと、あるいはソ連に対する譲歩がなされたのではないかという憶測を生んだのも無理からぬことであった。

さてこのヴィロライネン発言に対するケッコネンの反応は、苛烈なものであった。大統領府と外務省は、共同で「大統領声明」を作成し、6月20日にケッコネンがテレビやラジオを通じて以下の通り発表した。「私(ケッコネン)は、スオメン・クヴァレヘティ誌1979年24号のヴィロライネンインタビューを読んで驚かされた。ヴィロライネンの考えやイメージは、事実を全く反映していない。国会議長(ヴィロライネン)は、フィンランド外交やその国際的立場について間違った発言をしたことに責任がある。このことは私にとって、全く考えられないことであ

る。こうした彼の行動は、国家に損害を与えている。わが国の国際的な評判は、現段階で評価することは不可能である」(括弧は筆者)。⁸⁰⁾「間違った発言」とは、ヴィロライネンが述べた「一般的な理由」のことを指すものと思われる。

ケッコネンはこの「大統領声明」を発表した当日に、国民連合党首脳(ホルケリ、スオミネン Ilkka Suominen、タヴァステイラ Veikko Tavastila)と昼食を共にしたのであったが、彼らはケッコネンの様子について、次のように描写した。「大統領は、ヴィロライネンに対して本当に怒っている。なぜならケッコネンは、ちょうどドイツがフィンランド化という言葉の使用を放棄するという知らせを受け取った時だからだ」。ケッコネンは、夏至爆弾発言について次のようにヴィロライネンをあからさまに難詰した。「ヴィロライネンには、熟慮する能力が欠落していることが明らかになった。彼のくだらない話は、止められなければならない。……もしフィンランドがその見解を十分に明らかにしなければ、フィンランド政治の目指すものについて、誤ったイメージを与えるという危険を冒すことになる。われわれには余裕がない。なぜなら重要なことは、われわれが、西独訪問の時に達成した利益を維持することにあるからだ」。⁸¹⁾

ところでヴィロライネンの発言は、なぜケッコネンの逆鱗に触れたのであろうか。それは、上記にある「西独訪問」や「フィンランド化」という言葉と大きく関わっている。ケッコネンは、1979年5月7日から11日にかけてドイツ連邦共和国(西独)を訪問した。この訪問においてケッコネンが最も力を傾注したことは、西独で「フィンランド化」というフィンランド政治

を揶揄中傷する言葉が使用されていることを指摘し、フィンランドとフィンランド外交に対する誤った理解を是正することであった。

そもそも「フィンランド化」という言葉は、1970年末期から80年代初期にかけていわゆる「新冷戦」の高まりを背景にして、西側世界の主として反共タカ派論者が好んで使った政治用語であり、したがってある一定のイデオロギー色を帯びたものである。その意味を端的に記せば、「西側のある国の内政・外交がソ連によって侵食され、次第にソ連寄りの政策を採るようになる」ということであらうか。あるいは「フィンランド化」とは、「ソ連化」に至る過渡期と位置づけることができるかもしれない。

ケッコネンは、西独訪問中に次のようにフィンランドの立場を訴えた。まず「フィンランド化」という言葉について、「フィンランドとは全く関係がないものであって、その議論は、フィンランドを著しく傷つけている」と述べた。さらにケッコネンは、次のように述べてフィンランドがソ連の影響から独立していることを強調した。「われわれフィンランド人にとって保護者は必要ではないし、同情する‘理解者’も必要ではない。われわれは国家として成年に達しており、自分の問題を対処することができるのである」。「(フィンランド・ソ連関係は) 真の平和的共存であると言うことができるのを誇りに思う。二つの全く違った国家、つまり小国と大国、北欧－西欧的な市場経済国家と社会主義の大国が互いの生活を尊重し、広範な協力を印象づける隣国関係になるよう努めてきた。私はこうした結果について、道徳的に価値のあるものとさえ考える。それについて憐れみを請うつもりはない」(括弧は筆者)。⁸²⁾ さらにケッコネンは、フィンランドの中立政策が、国際的な緊張

緩和の促進や紛争の平和的解決に貢献できることを主張した。⁸³⁾

ケッコネンは、この西独訪問の成果について大いに満足であったようである。彼はある書簡の中で、次のように述懐している。「ホスト国のわが国に対する雰囲気は、非常に肯定的なものであり、われわれの国際的立場は、訪問中に著しく強化されたという強い印象を得た。西側の新聞は、一般的に‘フィンランド化’という用語を放棄する傾向にある。それは、われわれが行ってきた政策の大きな勝利であると考える」。⁸⁴⁾

ところが西独訪問の成果とケッコネンの満足感とは、長くは続かなかった。ヴィロライネンの夏至爆弾発言が、それらをもろくも打ち砕いたからである。6月18日にボン駐在のフィンランド大使リュトコネン (Arvo Rytkönen) は、ヴィロライネン発言について次のようにケッコネンへ報告した。「個人的に私 (リュトコネン) は、一般的な理由と要素が国民連合党の入閣を阻んだというヴィロライネン国会議長の発言によって、事態は困難になったと思っている。この点において考えられるのは、フィンランド対外政策を中傷誹謗するために、フィンランド化という用語を使うことは正しいと見なされてきたことである。一般的に言って、フィンランドに対して強く疑念をもって見られていることは、すでに知られているようにモスクワが、われわれに行動指令を出しているということである」。⁸⁵⁾つまりリュトコネンは、ヴィロライネンの発言が「フィンランド化」論議を再燃させ、その結果ケッコネンの西独訪問の意義が、消散してしまうのではないかと懸念を發したのである。

フィンランド政府は、リュトコネンの懸念が現実のものにならないように、6月19日に外務

省を通じて外国向けに「公式見解」を發表した。その主な内容は、「ヴィロライネンのインタヴューは、内政上の論争が反映されたものであり、フィンランド対外政策の基本的解釈についていかなる変更も示していない」⁸⁶⁾ というものであった。

ところがこうした努力は効を奏さなかった。6月20日付の西独紙『フランクフルター・アルゲマイネ』(Frankfurter Allgemeine) が、一面で「フィンランドで再び霜夜事件」という見出しで、ヴィロライネン発言を報じたからである。この報道については、リュトコネン大使より同日にケッコネンへ電話で報告された。ケッコネンは、「ヴィロライネンが、ボン訪問の最も重要な成果を台無しにした」と述べて怒りをあらわにし、コルホネン外務省次官補とペルットネン大統領府長官に対して、強硬な内容の「大統領声明」(前出76~77ページ)を作成することを命じたのであった。⁸⁷⁾

一方の当事者であるヴィロライネンは、6月20日午前11時30分に大統領声明をラジオで聞いた。彼は、すぐにケッコネンに電話をかけ、「私と会いもしないで、なぜ私を非難するのか」と抗議を申し入れた。これに対してケッコネンは、ペルットネン大統領府長官を介して、この問題を中央党執行部で取り上げるべきでないこと、大統領側としてはこの問題の取り扱いを打ち切ることを一方的に通告した。これにより夏至爆弾発言事件は、とりあえず幕切れを迎えたように見えたのであった。⁸⁸⁾

(2) ヴィロライネン失脚工作

しかしながらその後ケッコネン側は、夏至爆弾発言を口実にして、ヴィロライネンの権力を剝奪しようとする動き、つまり彼を中央党党首と国会議長という要職から引きずりおろすこと

を意図した圧力を波状的に加えていったのであった。ここに至ってフィンランドの対ソ関係のあり方を背景にした国民連合党の入閣問題は、ケッコネンの権力意志に抗するヴィロライネンの戦いという政治闘争が絡み合いつつ展開していくことになったのである。そして強調すべきは、この闘争は、多かれ少なかれ次期大統領選挙をめぐる両者の思惑によって突き動かされたものであったことである。

それではケッコネンとヴィロライネンの軋轢について、まずはケッコネン側の動きから見ていくことにする。ケッコネンは、1979年8月に元首相ミエットネンを介して、ヴィロライネンに国会議長と中央党党首の辞任を促す書簡を送っている。⁸⁹⁾ ヴィロライネンの回顧録によれば、この他にケッコネンのメッセンジャーとされる人物がヴィロライネンと数回接触し、彼に国会議長と党首の辞任を迫っている。ヴィロライネンは、このメッセンジャーの名前を明かしていないが、スオミの記述によればこの人物は、中央党のロイッカネン (Jouko Loikkanen、元第二財務大臣) であったとされる。⁹⁰⁾ なおケッコネンは、自分の政治的意思を伝達する際の手法として、メッセンジャーを頻繁に用いていた。

ロイッカネンは、大統領の意向として次のようにヴィロライネンへ伝えた。

- ① ヴィロライネンが、1980年2月に開会される国会で議長に選出されたならば、大統領を辞任する。もし国会がヴィロライネンを議長に選出したならば、国会を解散し選挙を行う。
- ② もしヴィロライネンが国会議長に選ばれたならば、大統領は自分の後継大統領として推さない人物のリストを公表する。ヴィロライネンは、そのリストの最初にくるだ

ろう。

- ③ 中央党トゥルク大会 (1980年6月) の前に、ヴィロライネンが次期党首に立候補しないと発表すべきだ。

このようなヴィロライネンを政治的に失墜させようとするケッコネンの圧力に対して、ヴィロライネンは、「もし中央党の国会議員団が、私 (ヴィロライネン) を党首候補に推したならば、立候補を断る理由はない。フィンランド国会は自由に議長を選ぶのであって、大統領は介入できない」(括弧は筆者) と回答して、ケッコネンの要求をはねつけたのであった。⁹¹⁾

ヴィロライネンによれば、ケッコネンは、国会議長の交代については強く拘泥しなかったようである。⁹²⁾ ちなみにヴィロライネンは、1980年2月1日に国会議長に引き続き選出されている (ヴィロライネンは、1966年～68年と1979年～83年に国会議長を務めた)。しかし中央党党首の座からヴィロライネンを引きずり落とそうとする策動は熾烈であり、時に陰湿でさえあった。そうした活動は、ケッコネンのみならず、次期党首を狙うヴァユリュネンと中央党の若手グループなどによっても行われた。同グループは、1980年6月の中央党トゥルク大会へ向けて、世代交代の必要性を喧伝していたのである。例えばこうしたグループは、夏至爆弾発言を材料にして、ヴィロライネンには外交能力、特に対ソ関係を処理する能力が不足していると批判した。さらに彼の離婚問題まで持ち出して、指導者としての資質に欠けるとの攻撃も行われたのであった。⁹³⁾

ヴィロライネンは、ケッコネンが1970年代を通じて自分を打倒しようとしてきたこと、そしてヴァユリュネンも党大会のたびに、自分を失脚させて、党首の座を射止めようと暗躍してき

たことを指摘している。⁹⁴⁾ ともかく国民連合党の入閣問題をめぐって発生したケッコネンとヴィロライネンの対立は、ヴァユリュネンが参画することによって、それぞれの恩惑が交錯しながら進行していくことになる。

ヴィロライネンを中央党党首の座から追い落す、というケッコネンの執念とも言うべき政治目的は、1980年6月6日の中央党トゥルク大会でついに達成された。同大会で実施された党首選挙で、ヴァユリュネンがヴィロライネンを1,738票-1,611票で破って、新党首に選出されたのであった。これで、中央党における1964年以来のヴィロライネン体制に終止符が打たれたのである。もともとヴィロライネンは、このトゥルク大会における党首選挙に立候補するにあたって、いずれにせよ1982年には自ら党首を退く意向を表明していた。つまり彼によればこの立候補は、ともかくケッコネン側の「不当な圧力」に屈しないという決然たる政治的意志に拠って立つものであったのである。しかしながらヴィロライネンは、ケッコネン側の攻勢に加えて、党内の世代交代の要求（ヴァユリュネン34歳、ヴィロライネン66歳）という大義名分を前にして、膝を屈せざるを得なかったのである。⁹⁵⁾

ケッコネンは、ともかく党首交代を望んでおり、ヴィロライネンに代わる新しい党首として最善の人物は、当時のヴァユリュネン副党首であると考えていたようである。この点を裏付けるように、新党首になったヴァユリュネンは、ケッコネンに対して党首選挙における支持に感謝する旨書簡を送っている。⁹⁶⁾ とはいえケッコネンは、表立って反ヴィロライネン工作をしていたわけではなかった。すでに述べた通りケッコネンは、ロイッカネンというメッセンジャーを通じて、ヴィロライネンに党首や国会議長の

辞任を迫っていた。「蛇のような能力で」ヴィロライネンを失脚させようとやっきになっていたヴァユリュネンなども、ある程度ケッコネンの意を受けて活動していたと見られていた。⁹⁷⁾ 例えば1981年の国会議長選挙で、ヴィロライネンの留任を阻むべく活動した人物の一人がヴァユリュネンであったのだが、彼の背後にはケッコネンがいたとされている。⁹⁸⁾

次にケッコネンが、なぜかくも執拗にヴィロライネンの失脚を狙ったのか考えてみたい。その理由として、ここでは次の二点をあげておく。まず夏至爆弾発言によって、ケッコネンのヴィロライネンに対する感情が決定的に悪化したことである。そしてもう一つは、1984年大統領選挙を睨んで、中央党におけるヴィロライネンの影響力を削いでおきたいというケッコネンや側近の思惑があったことである。以下では、この二点についてしばらく考察を行いたい。

前者については既述した通り、ケッコネンは、夏至爆弾発言によって、1980年5月の西独訪問の成果を台無しにされたと憤慨していた。ケッコネンの怒りがどれほどのものであったかは、ヴィロライネンの謝罪をにべもなくはねつけたことから知ることができる。次に記す両者の手紙のやり取りが、このことを明らかにしている。

まず1980年3月3日のヴィロライネンの手紙を抜粋引用する。「ケッコネン大統領へ 貴殿（ケッコネン）が私（ヴィロライネン）を非難するのは、ある程度もっともなことだ。なぜなら私は、自分のインタビュー記事をチェックしていなかったからだ。……驚くほど激しい貴殿の非難が、私を傷つけた。……私は、貴殿と自然な会話の機会が与えられることを希望する。それが与えられないのであれば、私は今ここで、貴殿に心から許しを請う。ヴィロライネン」

(括弧は筆者)。⁹⁹⁾ われわれはこの手紙から、自分の発言によって生じた紛糾の責任について、インタビュー記事を編集した側に転嫁しようとするヴィロライネンの意図を読み取ることができよう。

一方のケッコネンは、同年3月20日に返信をヴィロライネンへ送った。まずケッコネンは、書簡の中で新聞論評を紹介しながら、次のようにヴィロライネンの政治的責任を糾弾した。第一にヴィロライネンが発言した「一般的理由」という箇所が、大統領の権限に属する外交問題に誤って立ち入ったものであったこと、第二にこの発言が、大統領の西独訪問の成果を台無しにしたために、「大統領声明」(1979年6月20日、前出76～77ページ)を出す必要に迫られたこと、第三にヴィロライネンに対しては、政治的モラルの点から国会議長を辞任すべきだという声があることである。そしてケッコネンは、次のような決定的な言葉をヴィロライネンに投げつけたのであった。「あなた(ヴィロライネン)が、外交方針に立ち入ろうとしたのは議論の余地がない。あなたが外交問題の扱いで成功したことはなかった。なぜ外交に介入したのか? この問題について、手紙のやり取りはこれで終りにしよう。ケッコネン」(括弧は筆者)。¹⁰⁰⁾ ここで強調したいことは、ケッコネンが憤慨しているのは、ヴィロライネンが外交に容喙したということである。しかもそれが、フィンランド外交の根幹をなす対ソ関係に関わる問題であったことである。対ソ方針の解釈権を独占し、それを武器にして、自分に対抗する勢力を処断するという政治手法は、ケッコネンの権力の行使形態の一つと言っていいただろう。そしてこうした権力のあり様に、ケッコネン体制に特徴的であった内政と外交の結節点を見い出すことができる

のである。

ケッコネンは、ヴィロライネンが夏至爆弾発言の責任をとって、自発的に要職から退くことを希望していた。ところがこの発言のあとヴィロライネンは、その態度を抑制するどころか、公然とではないにしてもたびたびケッコネンに批判的な言動を繰り返していたようである。このヴィロライネンの不遜な態度がケッコネンの怒りを増幅させ、彼の体面を大きく傷つけた。こうしたことが、「ヴィロライネン降ろし」に拍車をかけたものと考えられる。¹⁰¹⁾ 一方ヴィロライネンは、1979年12月にケッコネン側が、夏至爆弾発言を蒸し返し、自分への非難を強めた、と理不尽さを強調している。¹⁰²⁾

ケッコネンがヴィロライネンの失脚を欲した第二の理由として、1984年大統領選挙に関わるケッコネン側の意図について述べたい。1900年生まれ of ケッコネンは、70年代後半に至って心身の衰えや健康上の不安が顕在化してきたものの、依然として彼は、‘国父’として厳然と聳え立っていた。したがって引退説が囁かれる一方で、1984年の大統領選挙に六選を目指して立候補するという観測も流れていたのである。管見する限り、ケッコネン自身はその意志を明言していなかったようであるが、側近のウーシタロなどは、「ケッコネンは、1984年の後も大統領を務めることが可能だ」とする希望を語っていた。¹⁰³⁾

1984年大統領選挙を射程に入れるならば、ケッコネンおよびケッコネン支持グループにとって、反ケッコネン的なヴィロライネンの増長を抑えること、そのためには、彼を党首や国会議長といった要職から解任して、中央党大統領候補の可能性を潰すことが肝心であった。ヴィロライネンの夏至爆弾発言は、そのための格好の攻撃

材料であったと言えよう。

一方ヴィロライネンは、ケッコネン側の圧力は、理不尽な政治的意図に基づくものであり、夏至爆弾発言の後に自分がケッコネンの怒りの前にひれ伏し、自発的に要職から身を引かなかったことに対する報復だと抗弁した。その根拠として彼は、次のように主張する。第一に夏至爆弾発言と同種の発言は、彼の前にもコイヴィストやヴァユリュネンがしていたが、ケッコネンから何ら「お咎め」がなかったことである。¹⁰⁴⁾

第二にヴィロライネンは、1979年5月の組閣以前に、ケッコネンが国民連合党を入閣させるつもりはないこと、そして左翼諸政党と中央党の連立による国会多数派内閣が成立しなければ、大統領を辞任するとさえほのめかしていたことを指摘する。つまりケッコネンが国民連合党の入閣を阻んだのであって、彼の希望通りの政権を作ったにもかかわらず批判される筋合いはないとヴィロライネンは憤るのである。¹⁰⁵⁾

第三にヴィロライネンは、1958年霜夜事件の時のケッコネンの発言を指摘する。当時のファールホルム内閣が、「反ケッコネン的だ」としてソ連側から様々な圧力を受け、結局瓦解を余儀なくされたことはすでに述べた通りである。この内閣の外相であったヴィロライネンによれば、「一般的な理由」のため、内閣は辞職すべきだ」と当時述べたのは、ほかならぬケッコネン大統領その人であった。¹⁰⁶⁾ この二十年後ケッコネンが、自分が発言した同じ言葉をめぐって他者を論難するのは道理に合わないとしてヴィロライネンは主張する。要するに彼は、1979年5月の組閣にあたって、国民連合党の入閣の期待が強かったため、自分はそのスケープゴートにされただけだと訴えるのである。¹⁰⁷⁾

ヴィロライネンは、中央党党员や国民の多く

が、夏至爆弾発言の後のケッコネンの理不尽な行動を批判し、自分を擁護してくれたと述べる。¹⁰⁸⁾ しかしながらスオミによれば、中央党内部では、ケッコネン支持グループのみならず、ヴィロライネンを支持していた右派グループの中からも、夏至爆弾発言についてヴィロライネンの責任を問う声があがり、党首交代の要求すら出ていたのであった。¹⁰⁹⁾ はからずもヴィロライネン自身が認めている通り、夏至爆弾発言の後まもなくの新聞論調は、彼にとって厳しいものが多かった。例えば、「ヴィロライネンは大統領の権限（外交）を侵犯した」（括弧は筆者）として、従来のフィンランド政治から逸脱したヴィロライネンの姿勢がもっぱら指弾されていたのである。¹¹⁰⁾

(3) ヴィロライネンの目的

ところでそもそもヴィロライネンは、なぜ夏至爆弾発言なるものをしたのであろうか。すでに触れた通りこの発言当時彼は、国会議長と中央党党首という要職を兼任しており、名実共にケッコネンに次ぐ有力政治家の一人であった。さらに彼は、第二次ケッコネン内閣（1951年1月17日～9月20日）に入閣以来、数々の閣僚を歴任し、1964年から66年にかけて首相も務め上げている。そして「ポストケッコネン」の最有力候補の一人として目されていた人物である。それほど的人物が、自分の発言によってケッコネンの反感を買い、内外に波紋を起こすことを予想していなかったとは考え難い。したがって彼の発言は、単なる失言と見なすこともできようが、何らかの政治的計算に依拠したものと想定することもできるのではないかとと思われるのである。ここでは、次期大統領選挙との関連において考察することにする。¹¹¹⁾

ヴィロライネンの発言の意図に関して推測できることは、この発言は、彼が「ケッコネン後継レース」あるいは「1984年大統領選挙」を有利に進めるための政治的計算に基づくものであったのではないかということである。ヴィロライネンは、その発言の中で‘一般的な理由’という言葉を巧みに織り込んで、1979年5月の第二次コイヴィスト内閣の誕生が、ケッコネンによる不必要な対ソ譲歩あるいはソ連の圧力を伴うものであったことを連想させた。敷衍して言えばヴィロライネンの発言には、次期大統領選挙に向って、中央党や他の政党のみならず国民の中に、「反ケッコネン・反ソ連」の気運を呼び起こし、その気運を「ヴィロライネン支持」へ向かわせようとする意図が伏在していたのではないかと想定されるのである。

しかしながら対ソ関係が組閣を左右したとするヴィロライネンの見解については、コイヴィストがこれを次のように明白に否定している。「私(コイヴィスト)が聞いたところでは、彼(ヴィロライネン)がインタビューで述べたことは、事実として間違っている。……国民連合党が入閣しなかったのは、左翼政党側が国民連合党と協力することを望まなかったからである。(組閣交渉において)左翼側から対外政策に関する議論を持ち出したことはなかった。……国民連合党は、中央党やわれわれとは意見を異にする人々よりもさらに距離が遠かったということである」(括弧は筆者)。¹¹²⁾ この発言の中でコイヴィストは、国民連合党の入閣が実現できなかったのは、ヴィロライネンが示唆するような対ソ譲歩やソ連の圧力のためではなく、社民党や人民民主連盟が国民連合党と折り合いがつかなかったという内政上の問題を指摘したのである。しかし事実関係はどうであれ、夏至爆弾発

言とその後の一連の経緯が、「反ケッコネン・反ソ連」のムードを多少なりとも掘り起こしたとすれば、ヴィロライネンにとって一定の成果があったといえるであろう。

ヴィロライネン自身は、もちろんこうした意図があったとは述べていない。しかしはからずも彼自身が指摘する通り、「ヴィロライネン大統領」へ向けた筋書きは頓挫したにしても、ある一定の段階までは実現されたのである。彼は回顧録の中で、次のように述べている。「私は、夏至爆弾発言に関する出来事やその議論が、大統領選挙人選挙の結果に大きく影響を与えたと思う。ケッコネンは、尊敬できる偉大な国家元首だけれども、国民は彼の後に別のタイプの人間(コイヴィスト)を選ぶことを望んだ。同じような意図が、1981年11月の中央党クオピオ臨時大会(Kuopio)で見られた。党の指導者は、最後まで一般党員を従わせようとした。しかし党大会の出席者の大多数は、別の決定をしたのである」(括弧は筆者)。¹¹³⁾ 引用中の「別の決定」とは、クオピオ臨時大会において、ヴィロライネンがケッコネン路線の忠実な継承者と見られていたカルヤライネンを破って、中央党の大統領候補になったことを指す。

そもそも1956年以来のケッコネン体制とは、大掴みに言えば「親ソ中立」という外交・内政を貫く大方針のもと、外交はケッコネン大統領が独占し、内政は彼の指導のもとで、いくつかの例外はあったにせよ、基本的には社民党と中央党を主軸とする左翼中道内閣によって運営されてきたといっていいただろう。このようなフィンランド政治の基本的枠組みに照らしてみれば、1979年3月の国会選挙で万年野党の国民連合党が勝利を収めたことは、国民がケッコネン体制に対してある一定の異議を突きつけたのであり、

そしてヴィロライネンの夏至爆弾発言も、同様の意味があったといっているだろう。それゆえにケッコネンは、この発言に対して過剰とも思える反応を示したのである。

ヴィロライネンは、夏至爆弾発言事件を総括して、「ケッコネン時代が終焉に近づいた兆候である」と述べた。確かにヴィロライネンが、ケッコネンの‘恫喝’に屈することなく、中央党党首や国会議長の職を固守したという事実は、ケッコネンの威信が弱体化したことの証左であろう。そしてヴィロライネンは、次の通りケッコネンの政治スタイルが、もはや国民の間に受容されなくなってきたと結論づけるのである。「国民は、ケッコネンの長すぎる時代とは決別したかったのだ。大統領として最後の時期のケッコネンは、強権的であったことが知られ始めた。年老いた大統領は、自分の側近を使って権力を振るい、国民の声は彼の耳に入らなくなった。……ケッコネンのあとに新しいケッコネンは望まれなくなったのである」。¹¹⁴⁾

このヴィロライネンの指摘は、ケッコネンをとりまく当時の政治状況を考える際に、示唆に富むものである。1970年後半に至って、ケッコネンの健康問題が次第に顕在化すると共に、彼の長期支配ゆえに国民のあいだに必然的に倦怠感が広がっていったこと、さらに政界の停滞・閉塞状況が生まれていったことは確かであろう。こうした雰囲気の一つの潮流となって、揺らぐことのないと思われていたケッコネン体制の基礎を徐々に侵食していったのであり、同時に政党政治の権謀術数から距離を置き、清新なイメージのコイヴィストに国民の期待が集まる素地を形成したのであった。

ヴィロライネンは、夏至爆弾発言事件の結末について、フィンランド国営放送記者トイヴァ

ネン (Erkki Toivanen) 他による興味深い評価を紹介している。それは本稿で述べてきた通り、ケッコネンがヴィロライネンにさまざまな圧力を加えたのは、ヴィロライネンの次期大統領への道を閉ざすことを意図したものであったということである。そしてトイヴァネンらによれば、次期大統領候補として最有力視されていたカルヤライネンは、ケッコネンとの関係が修復不可能なほど悪化しており、結局ケッコネンの後継者として残った人物は、コイヴィストであったというのである。¹¹⁵⁾

こうした評価を踏まえて結論的に言えば、本稿で今まで取り上げてきた1979年国会選挙と第二次コイヴィスト内閣の成立、そして国民連合党の入閣問題と夏至爆弾発言事件という一連の政治過程は、コイヴィスト大統領の誕生という一点に収斂されてくると考えることができよう。つまりこれらの出来事は、コイヴィストがケッコネンの後継者としての地位を固めるうえで、有利に作用したのである。

注

第3節 国民連合党の入閣問題とソ連

59) Suomi, *op. cit.*, s. 453, s. 532.

60) *Ibid*, s. 463.

61) *Ibid*, s. 513.

62) *Ibid*, s. 465.

63) Korhonen, Keijo, *Sattumakorpraali*, Otava, 1999, ss. 19-20.

64) Vladimirov, *op.cit.*, s. 324.

65) *Ibid*, s. 319.

66) Suomi, *op. cit.*, s. 532.

67) *Ibid*, s. 531.

- 68) アンドロポフは、休暇中のツィネフに電話をかけ、「ウラディミロフをモスクワからある程度離れた所に移すべきだと考えている。君の考えはどうかね」とたずねた。ツィネフがこれに同意すると、アンドロポフは、「この問題について、君と合意することができてよかった」と言った後受話器を置いた。アンドロポフが、ウラディミロフの行き先をツィネフに伝えなかった理由は、反対されることを予期したからであろう。なおツィネフがウラディミロフのフィンランド勤務に反対した理由について、ウラディミロフは明らかにしていない。 Vladimirov, *op. cit.*, ss. 321-322.
- 69) *Ibid*, ss. 321-322.
- 70) *Ibid*, s. 322.
- 71) Lukkari, Matti, *Lauri Sutela*, Otava, 2003, ss. 173-181. Lehtinen, Lasse, *Aato-sta Jaloa ja Alhaistä Mielta*, WSOY, 2002, s. 607.
- 72) Suomi, *op. cit.*, s. 532.
- 73) Vladimirov, *op. cit.*, s. 326.
- 74) Lehtinen, *op. cit.*, s. 608.
- 75) Suomi, *op. cit.*, s. 532.
- 76) ステパノフ大使が更迭される見込みであることは、すでに1979年1月にウラディミロフからヴァユリユネン外相に伝えられていた。したがってステパノフの処遇は、ソ連指導部においてもある程度既定路線であったと考えられる。*Ibid*, ss. 530-532.
- 77) *Ibid*, s. 532.
- 78) ソ連外交を推し測る上で、おもてに表われないことは、その人物の正式の序列が、実際の権限と一致していないということである。ヤコブソンによれば、1970年代末のソ連大使

館職員43人の中でウラディミロフの公式上の地位は、上から9番目であった。しかしヤコブソンによれば、KGB 部長でもあったウラディミロフ参事官は、本当は大使館で一番地位の高い人物なのであった。Jakobson, *op. cit.*, s. 211.

第4節 夏至爆弾発言事件

79) Virolainen, *op. cit.*, ss. 49-56.

80) Suomi, *op. cit.*, s. 501.

81) *Ibid*, s. 501.

国民連合党の入閣問題に関わりの深い「大統領声明」が発表された当日に、ケッコネンは同党指導者たちと昼食を共にしていた。ケッコネンと国民連合党の関係は、疎遠であるとされてきたが、同党首脳や若手の中には将来の政権参加を目指して、ケッコネン支持を明確に打ち出す者も出てきていた。したがってケッコネンは、そうした国民連合党内部の‘穏健派’とたびたび接触を図っていた。反対にケッコネンと溝が深かったのは、反ケッコネン・反ソ連を標榜するユンニラなど同党内部の右派の人たちであったと言えよう。

82) *Ibid*, ss. 492-494.

83) *Ibid*, s. 493.

84) *Ibid*, s. 496.

85) *Ibid*, s. 499.

86) *Ibid*, s. 499.

87) *Ibid*, s. 499.

88) Virolainen, *op. cit.*, ss. 71-72.

89) *Ibid*, s. 93.

90) Suomi, *op. cit.*, s. 626. ヴイロライネンは、1979年12月末、80年1月11日、同年1月23日にロイッカネンと直接会った。さらに両者のあいだでは、電話での応対も行われた。

- 91) Virolainen, *op. cit.*, ss. 93-102.
- 92) *Ibid*, s. 100.
- 93) *Ibid*, s. 103, s. 132.
- 94) *Ibid*, s. 102, s. 134.
- 95) *Ibid*, ss. 140-144.
- 96) Suomi, *op. cit.*, s. 626.
- 97) Virolainen, *op. cit.*, s. 140.
- 98) Suomi, *op. cit.*, s. 636.
- 99) Virolainen, *op. cit.*, s. 106.
- 100) *Ibid*, ss. 115-116.
- 101) Suomi, *op. cit.*, s. 626.
- 102) Virolainen, *op. cit.*, s. 96.
- 103) Jakobson, *op. cit.*, s. 244.
- 104) Virolainen, *op. cit.*, s. 48, s. 89.
- 105) *Ibid*, s. 90.
- 106) *Ibid*, s. 90.
- 107) *Ibid*, ss. 78-79.
- 108) *Ibid*, s. 79.
- 109) Suomi, *op. cit.*, s. 624.

中央党内部では、すでに1979年3月の国会選挙で敗北を喫した後に、ヴィロライネン党首の辞任要求が出されていた。*Ibid*, s. 626.

- 110) Virolainen, *op. cit.*, s. 78.
- 111) 夏至爆弾発言におけるヴィロライネンの意図について、本文で述べたもののほかに、ヴィロライネンのケッコネンに対する政治的報復、あるいはヴィロライネン自身に向けられた批判への反論、という見方も取り沙汰された。以下にこの2点について説明しておきたい。

まず前者であるが、これは彼が、1979年選挙の後に発足した内閣において、首相あるいは閣僚への就任をケッコネンによって阻まれたことに対する政治的報復であったとする見方である。次期大統領を目指すヴィロライネンにとって、首相の座につくことができなかったこと、少なくとも閣僚の立場から外されたことは、政治的威信の低下を意味するとともに、ひいてはポストケッコネンへの挑戦権の喪失という事態にもつながりかねないゆゆしき出来事であった。したがって夏至爆弾発言の中でヴィロライネンは、第二次コイヴィスト内閣の編成にあたって、ソ連の圧力があつたあるいはソ連に譲歩する形で進められたと示唆することによって、ケッコネン政治の‘瑕疵’を衝き、閣外に置かれた事に対する政治的報復をケッコネンに対して企てたと考えられるのである。Suomi, *op. cit.*, ss. 496-497.

次に、ヴィロライネン自身に向けられた批判への反論、という点について述べたい。これは夏至爆弾発言の目的が、ヴィロライネンあるいは中央党が国民連合党の入閣を拒んだという批判をかわすことであったとする見方である。つまりヴィロライネンが主張したいことは、‘一般的な理由’が国民連合党の入閣を阻んだのであって、ヴィロライネンや中央党にその責任はない、ということである。

実際に国民連合党からは、国会選挙で勝利したにも関わらず入閣を果たせなかったのは、中央党やヴィロライネンが抱いていた「権力政治の目的のためだ」という批判が出ていた。これに対してヴィロライネンは、国民連合党と組閣で合意できなかった理由は、「国民連合党の対外政策が国益を忘れており、信頼をなくしているためである」と弁解して、こうした批判を打ち消そうとしたのであった。

Ibid, ss. 497-499.

ただ事実として言えることは、少なくとも中央党は、国民連合党と連立内閣の編成に踏み切らなかったということである。これには

次のような背景がある。そもそも1979年国会選挙後の組閣に関する観測の一つとして、国民連合党が社民党と提携して、保革連立内閣を成立させ、中央党を政権から締め出す動きに出るのではないか、という見方があった（その後コイヴィスト大統領のもとで、1987年4月30日にホルケリを首相とする保革連立内閣が発足している）。実際のところ当時の国民連合党指導部は、政権入りを目指して穏健路線を採っており、ケッコネンとの関係の構築を図っていた。*Ibid*, s. 497, ss. 486-487.

社民党と国民連合党が接近する事態になれば、恒常的に政権党の地位を占めてきた中央党とその党首ヴィロライネンにとって、影響力の大幅低下は避けられない。また仮に国民連合党と中央党による保守連立内閣を組むにしても、中央党は国会選挙で後退を余儀なくされ、国民連合党の後塵を拝する国会第三党に低落したため（1979年国会選挙では国民連合党47議席、中央党36議席を獲得）、閣内における発言力の低下は免れないところであろう。さらに中央党内部では、もともと親西欧・反ケッコネン色が濃い国民連合党とは相容れないという声も根強くあった。要するにヴィロライネンにとって残された選択肢は、左翼諸政党が求める通り左翼中道内閣の存続しかなかったのである。

112) Koivisto, *Politiikka & Politikointia*, s. 64.

113) Virolainen, *op. cit.*, s. 161.

114) *Ibid*, s. 161.

115) *Ibid*, s. 87.